

● 被差別部落の歴史 ●

被差別部落と呼ばれる地域では、特殊な知識・技能を持った人々が多くいました。その中に、死んだ牛馬の処理の知識・技能に長けた人たちもいました。（あの杉田玄白が、『解体新書』執筆の参考にしたほど！）肉・内臓を食用や漢方に、皮を日用品に加工するなど、余すことなく活用していました。皮を使って太鼓を作る技術が発展した地域もあります。

これらの地域は、その周囲の村の人々の生活に無くてはならない特別な存在でした。しかし、この「特別視」が歴史の中で「差別視」へと変わり、そのようにして被差別部落が形成されていきました。「北芝」にも、このような歴史があります。

● LUMIERE=光 北芝、発展の歴史 ●



北芝に限らず、被差別部落には、かつてインフラや教育環境などが不十分だった場所が多くありましたが、運動の中で整備していきました。でも、それだけでは差別は解消しないと考え、**北芝の人たちは団結し、「誰もが安心して暮らせるまち」を目指してさまざまなアイデアを出し合い、チャレンジしてきた**そうです。

その一環で、太鼓の打ち手の育成にも力を入れ始めたということです。現在は魅力のある取り組みや催し物がいっぱい、見せてもらった写真には、町の人たちの生き生きした顔が写っていましたね。

● 大事なことは…… ●

第2回人権 LHR の感想を読むと、被差別部落出身の人や、一般にマイノリティーと呼ばれる人に対して「接するときの言葉遣いに気を付ける」と書いた人が多かったです。もちろん、それは誰に対してでも大事なことです。しかし、一番大事なのは、丸岡さんの話にもありましたが、「豊かな関係性」を築くことだと思います。**本音でぶつかり合って、一緒に時間を過ごして、つながっていくこと。その姿勢が、部落差別に限らず、さまざまな人権課題を解決する第一歩だ**と思います

みんなの人生には、今後、多くの出会いがあります。その出会いを大切にして、「豊かな関係性」を築いていってくださいね。